

「花子とアン」の時代から現代を考える

第一生命経済研究所 代表取締役社長 矢島 良司

NHK朝の連続テレビ小説「花子とアン」が好評で話題を集めた。とりわけ、ドラマ中盤のハイライトである蓮子（柳原白蓮がモデル）を巡る事件と関東大震災に遭遇する主人公花子（村岡花子がモデル）を取り巻く人達の物語は劇的で多くの視聴者をテレビに釘付けにした。

時代は、第一次世界大戦が終了して空前の好況が去り、大戦景気のブームが泡のように消えた丁度その頃であった。欧州列強の生産力回復により輸出は後退して輸入超過に転じ、大戦時の花形産業であった鉱山・造船業の停滞や重化学工業、紡績・製糸業が苦境に立たされた。

株式相場も1920年（大正9年）3月には大幅下落し、日本経済は不況に見舞われた。

いわゆる「戦後恐慌」である。この不況は重篤であり、銀行も企業も多く不良債権を抱えたが、根本的に解消されることなく時計の針が進んでいった。

一方、国際関係は1919年（大正8年）パリでの対独講和会議に続き、1921年（大正10年）ワシントン会議が開催された。

日本は欧米列強と協調外交を展開し、とりわけ軍縮については国家財政の健全な運営の観点から海軍の縮小を実施するとともに陸軍についても兵力を削減した。

そして運命の日を迎える。

1923年（大正12年）9月1日、関東地方一帯は相模湾を震源とするマグニチュード7.9の大地震に襲われた。死者、行方不明者10万人以上、罹災者340万人、経済損失額45億円（当時の名目GDP約1/3に相当）という空前の惨害となった。

政府は復旧、復興のための予算計上など財政面での対応に加え、金融面では被災地の銀行、企業を救済するためのモラトリアム（支払猶予

令）を出し債務の支払を猶予する対応を行った。

続いて、銀行手持ちの手形のうち震災のために決済できなくなった手形（震災手形）を日銀が再割引する措置を講じた。

これにより、金融システムの崩壊は避けられ、経済秩序が維持された面は否定できないが、大戦中の放漫経営で競争力を失った企業やそうした企業に資金を提供していた銀行を人為的に延命するという負の側面も招いた。

その後、日本経済は長期の慢性不況が続き金融恐慌そして世界同時不況の中で金解禁に端を發した昭和恐慌に突入していく。

翻って現代の日本はどうか。

アベノミクス効果で長年のデフレから漸く脱出しつつあり、世の中の雰囲気もなんとなく明るさを取り戻しつつあるが、日本の将来には大きな課題、リスクが横たわっている。

1点目は、少子高齢化という人口動態の問題。有史以来の高齢社会での社会保障制度の再構築、財政の健全化等。

2点目は、地政学上のリスク。東アジアなどを巡る安全保障上の課題。

3点目は、近い将来に発生が予想される巨大地震。いずれも日本にとって避けては通れない課題だ。

デフレからの脱却、財政再建、外交政策、震災への対応と100年前の日本と似ている面もあるが、根本的に異なるのは当時の人口は右肩上がりが増えた時代であったということだ。

その意味では現在の方が問題は深刻かも知れないが、過去においても何度も大きなピンチがあり、先人たちはそれを克服して現在がある。

そう考えると歴史の教訓から真摯に学び、誰でもない私たちがこれらの課題を乗り越えていかなければならないのではないのか。